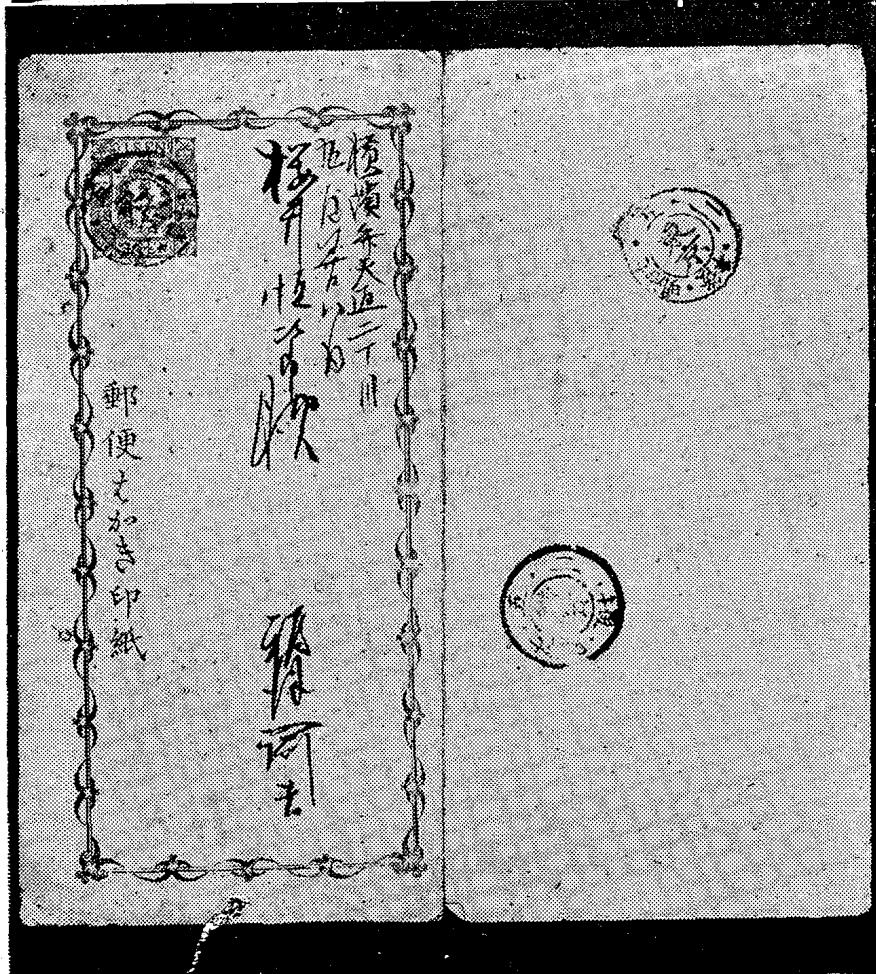


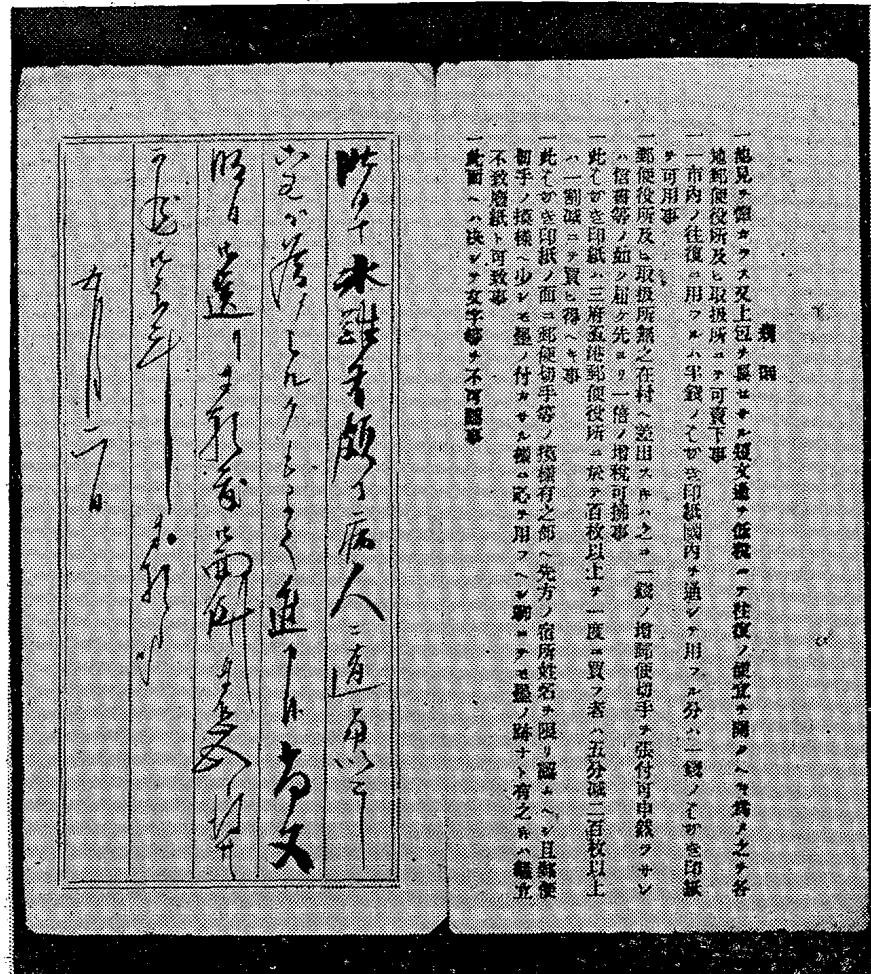
Title	福澤自筆の葉書
Sub Title	
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



福澤自筆



書葉筆

總見之體ナフ又上印ナ裏ニトテ類文通ノ爲程、ハ往復ノ便宜ナ開クヘキ爲ナ之未各
地郵便役所及ヒ取扱所ヨリ可賣下事、一市内ノ往復ノ用フハ半錢ノウカ印紙國內ヲ通シテ用フル分ハ二錢ノウカ印紙
一可用事、郵便役所及ヒ取扱所無之在村ヘ造出スルベニ、二錢ノ增額便切半ナ張付日中銀クナシ
ハ招請等ノ如ク相ノ先ヨリ一倍ノ増額可拂事、此レぞき印紙、三指直徑、郵便役所、松ノ百枚以上テ一度、買フ者ハ五分銀二百枚以上
ハ一刻減、一買ヒ得ヘタ事、此レぞき印紙ノ面ニ郵便切手等ノ捺印有之節、先方ノ宿所姓名ヲ限り譲スヘシ且該便
切手ノ捺印、少シモ差クサシ捺印必用フヘシ期ナカモ捺印跡ナト有之者ハ無充
不教廢紙ト可致事、此面ハハ次ノ文字等ナ不可識事

福澤自筆の葉書

福澤の書翰は今日までに知られてゐるもの一千數百通にのぼるが、その殆んど全部は巻紙に認めたもので、葉書に書いたものは一通もなかつた。事の簡便敏捷を尙ぶ福澤が葉書を利用しなかつた筈はなかつたらうと思はれるので、我々は久しく述べを探してゐたところ、果して茲に掲げた寫眞の遺墨が見出された。即ち今日までに知られてゐる福澤遺墨中の唯一の葉書である。昭和二十八年十月塾員中富久吉氏が慶應義塾に寄附せられたもので、中富氏はこれを骨董商より買入れたといふが、その骨董商はこれを或る切手蒐集家より買取つたコレクションの中から見出したといふことである。

この葉書は現今通用されてゐる一枚ものと異なり、楮和紙を二つに折り縦五寸四分横二寸五分四頁仕立て、第一面は青色刷りオーナメント罫で縁どり、左上隅に同色で一錢切手を刷り、左端中央に「郵便はがき印紙」の文字を刷り出してある。第二面は赤色刷で規則を掲げ、第三面が通信欄、第四面が無地である。

郵便ハガキ紙並封裏發行規則の出たのが明治六年十二月一日で、様式が改まつて現行の一枚ものになつたのが明治八年五月十日の官令によるから、この型の葉書の行はれたのは約一年半ばかりの間である。

この葉書には、スタンプが三つ押してある。第一面に「明治七・五・二・午後・東京」、第四面にもこれと同じものが押してあり、ほかにもう一つ「明治七・五・二・午後・横濱」とある。これによると明治七年五月二日に出したものが半日で横濱に到着して配達されたことを物語る。今日の速達よりも速かである。

文面は左の通りである。(句讀點は筆者)

昨日は氷難有、頗る病人に適當いたし、これが爲めミルクもよく進申候。尙

又明日御送り奉願度、御面倒奉恐入候得共、可然御取計奉願候。以上。

五月二日

葉書のおもて書きは次の通りである。

横濱辨天通二丁目

丸屋善八内

櫻井恒次郎様

福澤諭吉

福澤の母お順はこの年五月八日に數へ年七十一歳で病歿してゐる。この葉書はその死に先だつ一週間であるから、文中に記した氷とは、母の病用に用ひたものであらう。この頃はまだ東京に製氷が行はれてゐなかつたらしくから、函館の五稜廊の闇ひ氷を汽船で横濱に運び、横濱から汽車で東京へ運んだものであらう。

宛名の櫻井恒次郎は中津出身で慶應元年入塾、慶應義塾出版社の事に關係してゐたが、この頃は横濱の丸善に入社してゐたものと見える。丸屋善八はいふまでもなく丸善株式會社の創業當時の屋號である。

(畠田正文)